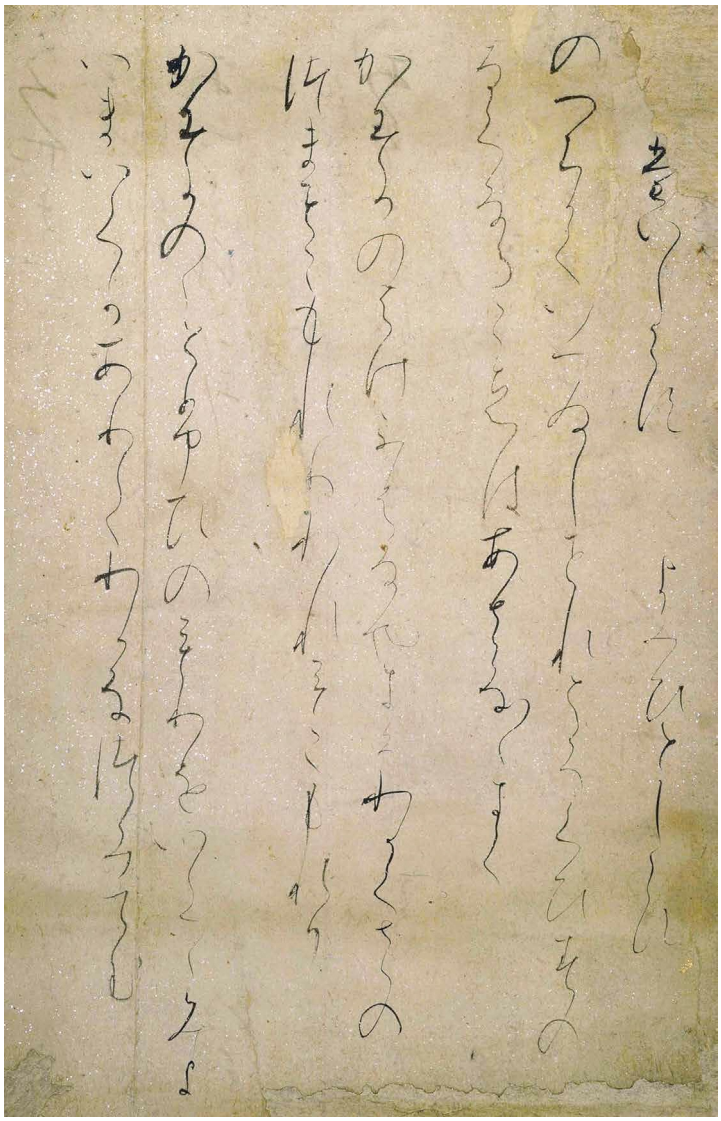
アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



のへちかく いへゐしせれは うくひすの
なくなるこゑは あさなゝきく

『古今和歌集』巻第一 春歌 上
ほか二首

亀山切 古今和歌集「のへちかく」
伝紀貫之筆
平安時代 十一世紀
静岡県立美術館

開館四十周年を迎えた県立美術館のコレクションは、森町藤江家に伝来した明治時代の国学者小杉榲邨（すぎむら）の旧蔵品を、開館準備中であった昭和五十五年（一九八〇）に受け入れた所から始まる。

丹羽亀山藩（現・京都府亀岡市）松平家に伝来した「亀山切」はその内の一点。『古今和歌集』写本で、もと綴葉（てつちょうそう）装冊子本とみられるが、現在は断簡などで分蔵されている。料紙は薄藍の繊維を雲状に漉き込んだ打曇（うちくも）に雲母（きら）が全体に蒔かれるが、この一葉には打曇がみられない。ただし、雲母の静謐な輝きが、繊細優美な書風、軽妙な連綿と相まって清雅な趣をたたえる。

（主任学芸員　薄田大輔）

No.
161
2026年度 | 春 |

展覧会のお隣同士

館長　木下 直之

これまでにたった一点だけの展覧会がなかったわけではない。ルーブル美術館から門外不出だったミロのヴィーナスが一九六四年に来日、国立西洋美術館で公開されると、一点の彫像を見るために八三万人（！）を超える人間が集まった。その十年後に東京国立博物館で開催された「モナリザ展」には、厳密にいうとレオナルド・ダ・ヴィンチのパトロンだった国王フランソワ一世の肖像画（ジャン・クルーエ作）も展示されていたのだが、押し寄せた一五〇万人（!!）の人間の目に、こちらはほとんど止まらなかっただろう。

しかし、展覧会とは、美術品が一堂に会することで意味が生まれる場所である。それが展示の醍醐味で、したがって、まずは展示する側がイニシアティブを持つわけだが、見る側にだってさまざまに読み解く自由がある。すると、展示の究極は二点ではないか。何と何とが隣り合うことで、そこには何らかの関係が生じるからだ。

そんなことを教えられたのは、広島市現代美術館の展覧会「1945年±5年」（二〇一六年）で、伊谷賢蔵《楽土建設》（一九四〇年、京都国立近代美術館蔵）と清水登之《難民群》（四一年、栃木県立美術館蔵）を目にした時だった。前者は満洲国建設の「五族協和」（中華民国の「五族共和」とは構成員が違う）という理想（それが「楽土」）を描き、後者はそれを実現しようとすれば先住者が難民と化すという現実を連想させる（清水が描いたのは中国戦線で目にした難民）。

ふたつの絵が横に並んだだけで、戦争の理念と現実が浮かび上がってくる。《難民群》の四年後に満洲国は消滅し、「引揚者」という新たな難民を生み出した。それは「五族協和」の一員、ほかならぬ日本人であった。

開館四十周年を記念した「静岡県立美術館をひらく」展が開かれなければ、起こり得なかった組み合わせを紹介したい。高橋由一《甲冑図》（一八七七年、靖国神社遊就館蔵）と高橋源吉《ヤマサ商標感得図》（九四年、浅草寺蔵）である。

《甲冑図》が第一回内国勧業博覧会に出品された時、その公式出品目録には内藤恥叟（ちそう）と安田善次郎による出品と記されていた。作者の扱いは小さく、二の次の存在である。そして二年後に、このふたりがこの絵を招魂社（のちの靖国神社）に奉納した。

《ヤマサ商標感得図》は、ヤマサ醤油主人の濱口儀兵衛が浅草観音のお陰で商標を得たことのお礼に奉納した。儀兵衛の娘の夢枕に観音が立つと（絵では光でしか表現されない）、手が勝手に動いて「𠮷」の字を紙の上に書いたのだという。高橋源吉は濱口から依頼を受けて制作したに過ぎない。

奉納者が重視されるのは、絵に奉納先があるからで、前者は観音、後者は靖国神社の祭神（戊辰戦争の官軍側戦死者）ということになる。そうした関係は、作者を重視する美術展からは見えて来ない。現代の美術館は、古今東西の造形物をできる限り「作者と作品」という関係に落とし込んで見せようとし、来館者もそれを期待して足を運ぶからだ。

絵の中に観音は存在しても、その姿を現さない（描かれない）。それは、浅草寺の観音が秘仏であり、たとえ開帳であっても、姿を現すのは前立観音像（まえだち）であることに通じる。さらにいえば、《甲冑図》に描かれた甲冑を身につけていたはずの人物の不在にも通じる。それは戦死の暗示かもしれない。つまり、描かれたものと同時に、描かれてはいないものが絵の中にいる。

実は、作者のふたりは「お隣同士」どころか、親子である。親の描いたあまりに有名な《鮭図》（東京藝術大学蔵、今夏の「NHK日曜美術館50年展」でお目にかかれる）の荒縄と、子による《ヤマサ商標感得図》の醤油樽を縛った荒縄は、ふたりをきつく結んでいる。この二点がいっしょに並ぶのは史上初、ふたりの時代にもなかったことだ。「ひらく展」の会場には、作品・資料合わせて百二十点を越える展示物が並ぶ。その何と何が隣り合っているのかに目を向けていただきたい。両者をひとつの視野に入れることで、初めて見えてくる世界がある。

茶畑と美術館の未来に向けて

県立美術館ボランティア「地域連携・草薙ツアーグループ」による展示のご紹介

学芸課長　石上 充代

現在、静岡県立美術館では七つのボランティアグループが活動しています。そのうち、美術館の茶畑を起点として活動を続ける「地域連携・草薙ツアーグループ」が、県民ギャラリーで展示を行うことになりました。

草薙ツアーグループの活動は、二〇〇五年、美術館や地域の知られざる名所を巡るツアー※の企画立案に参加した有志の人々が、「杉山彦三郎記念茶畑」を〝発見〟したことから始まります。静岡県立美術館が建つ谷田の丘は、お茶の優良品種やぶきたの生みの親・杉山彦三郎（一八五七―一九四一）の研究茶畑が広がっていた土地であり、彫刻プロムナードの一画には、彦三郎の功績を伝える記念茶畑があります。記念茶畑の由来や意義はいつしか忘れられていましたが、ツアーをきっかけにこれを知り、大切に思った人々が初期メンバーとなり、新たな美術館ボランティアとして草薙ツアーグループが発足したのです。ここから、記念茶畑の保護と顕彰を軸にした美術館と地域を結ぶための活動が展開していきました。

杉山彦三郎記念茶畑の茶摘み会

佐藤忠良《みどり》の脇で記念茶畑の解説をする田中貞三郎さん（右から２人目）

記念茶畑の歴史を調べるうちに、グループメンバーは、記念茶畑の保護のために尽力してきた多くの人々の存在を知るようになりました。そして、語り部たる皆さんの高齢化が進むなか、茶畑に心を寄せた人々の思いを広く伝え、未来に残したいと思うようになりました。これが、県民ギャラリーでの展示というかつてないチャレンジの動機です。

展示では、記念茶畑からの視点で谷田の丘の変遷を眺めていきます。①静岡の茶業を支える広大な研究茶畑だった頃、②県立文化施設の建設と園地の再整備が進み多くの茶の木が廃棄されるなか、どうにか記念茶畑に十三品種が残された頃、③草薙ツアーグループの活動が始まり、次世代の茶の木が植えられ茶畑が再生していく頃、という三期に分けて、茶畑の歴史をご紹介します。四十周年記念展と同時に開幕し、約二週間という限定的な会期となりますが、ぜひ記念展とあわせてご覧ください。

長らく茶畑保護のキーパーソンとして精力的に活動された故田中貞三郎さんはかつて、記念茶畑に立つ佐藤忠良の《みどり》を見上げながら、「茶の木の世話には邪魔なんだがな」とこぼされました。「まぁ、彫刻プロムナードですし…」などと、当時の私は苦笑いを浮かべながら同じように《みどり》を見上げたものです。しかし、静岡の茶業にとって意義深い土地に建てられた、いわば新参者の美術館にとって大事なのは、茶畑と彫刻、それぞれの意義を丁寧に伝え、互いに調和した風景として、プロムナードを行き交う人々に愛されるものとなるよう努めることだと考えるようになりました。茶畑の記憶を宿す場所にある静岡県立美術館ならではの、ここにしかない新しい価値を作っていくこと、これも〝美術館をひらく〟ことのひとつではないでしょうか。いつか田中さんにも「ここに彫刻があるのも悪くないね」と思っていただけるような、そんな新しい風景を、記念茶畑から作っていけたらと夢見ています。展示をご覧になった帰り道には、ぜひ「杉山彦三郎記念茶畑」にもお立ち寄りください。

※「草薙のんびりツアー　旧東海道を歩き、やぶきた原樹を観て、美術館でロダン体操」（二〇〇五年十月一日実施）
開催経緯など詳細は、『静岡 New Art「あなたの居場所」展』記録集（二〇〇六年）参照。

静岡県立美術館ボランティア
地域連携・草薙ツアーグループ企画展示
「茶畑と美術館―未来へつなぐ人々の思い」（仮）
会期　二〇二六年四月二十五日～五月十日
会場　静岡県立美術館　県民ギャラリーA
※入場無料

開館40周年記念展

静岡県立美術館をひらく７つの扉

2026年４月25日（土）～６月21日（日）

当館の建物について、みなさんはどのような印象をお持ちでしょうか。茶室のにじり口をイメージしたというコンパクトな造りの入口を抜けると、ひときわ高い天井のホールに、そびえ立つ大きな柱と大階段が姿を現します。外部から切り離されたこの静謐で重厚な空間に身を置くと、わたしは自然と「美の殿堂」という言葉を思い浮かべてしまいます。

四十年前の開館当初から、この建物の姿は大きく変わっていません。けれども、当館の完成予想図が表紙に使われた一九八四年七月刊行の『静岡県立美術館準備室ニュース』第一号［図1］からすでに、当館を指して「開かれた美術館」という言葉が使われていたことを知り、ちょっと意外な気持ちがいたしました。

当時の静岡県教育委員会教育長・吉川晴夫は、講演会や実技講座などの多彩な教育普及事業の計画と、国内では先駆的であった美術館ボランティアの導入を指して、この言葉を使用しています。しかし、その理念とは裏腹に、確固たる「壁」の存在を感じさせる当館の重厚な佇まいだけを見れば、「開かれた」という言葉は、どこかちぐはぐに響くようにも思います。

この違和感は、開館から四十年の間にわたしたちが「美術」に対して抱くイメージそのものが大きく変化してきたことによるのではないでしょうか。かつては、襟をただして学ぶべき対象であった美術は、今やより身近で、日常の延長線上にあるものへと姿を変えています。みなさんが美術館に求めることも大きく変わってきているはずです。「名品」と対峙し、じっくり鑑賞することは美術館の楽しみの一つです。けれども、それ以外にも、イベントに参加したり、何かを作ってみたり、ユニークなミュージアムグッズを探したり、親しい家族や友人たちと作品を見ながらおしゃべりを楽しんだり、思い思いにゆったりくつろいだりと美術館の楽しみ方はどんどん広がり続けています。

当館開館からの四十年の間に、世の中の普通やあたりまえも大きく様変わりしました。かつては「開かれた美術館」と受け止められていたとしても、その歩みをとめてしまえば、その逆にまでなりかねません。四十年の間に私たちは「開かれた美術館」を目指して様々な事業に取り組んできましたが、次の十年に向けて、ここで一旦、当館が積み重ねてきたものを見つめなおし、みなさんにとってもっと身近な場所になれるよう当館をオーバーホールしたい。そのように考えています。

本展は「静岡県立美術館をひらく」をテーマといたしました。館長と五人の学芸員［図2］が七つの展示室の室長をつとめ、それぞれ伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》［図3］やポール・ゴーギャン《家畜番の少女》などコレクションから厳選した作品を手がかりに、当館があたりまえとして、見落として

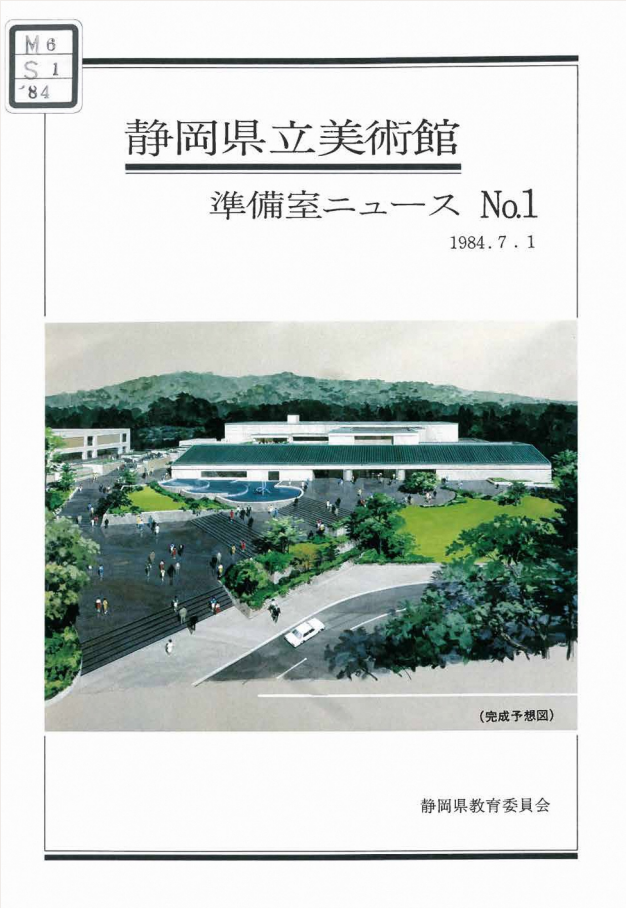


図1　『静岡県立美術館準備室ニュース』1号、1984年7月

きた問いを投げかけます。美術館とは何か、名品とは、作家とは何か。美術館での鑑賞とは何か。当館はなぜこの場所にあり、どのようにコレクションを築いてきたのか。これまでの当館のあたりまえをときほぐし、これからの姿をみなさんと一緒に想像してみたいと思います。

展示室の中だけにとどまりません。みなさん一人ひとりにとって当館がより身近な場所になれるように、今、館員一同でアイデアを出し合っています。

例えば、キッズスペースの新設や託児室のスポット的開室。エントランスホールにある「名品コーナー」への触図の設置、ホールでくつろげるソファの増設。あるいは、展示室内でのスマホ翻訳アプリの使用許可や、講演会での手話通訳の実施、やさしい言葉による解説の導入など。

他館の取り組みに学び、当館のこれまでの試みを積み重ねていくことで、当館のあたりまえをアップデートし、さらに次へとつなげていきたいと思います。建物そのものを改修するような大規模なものとはなかなかいきませんが、だからこそ今後も変更容易です。

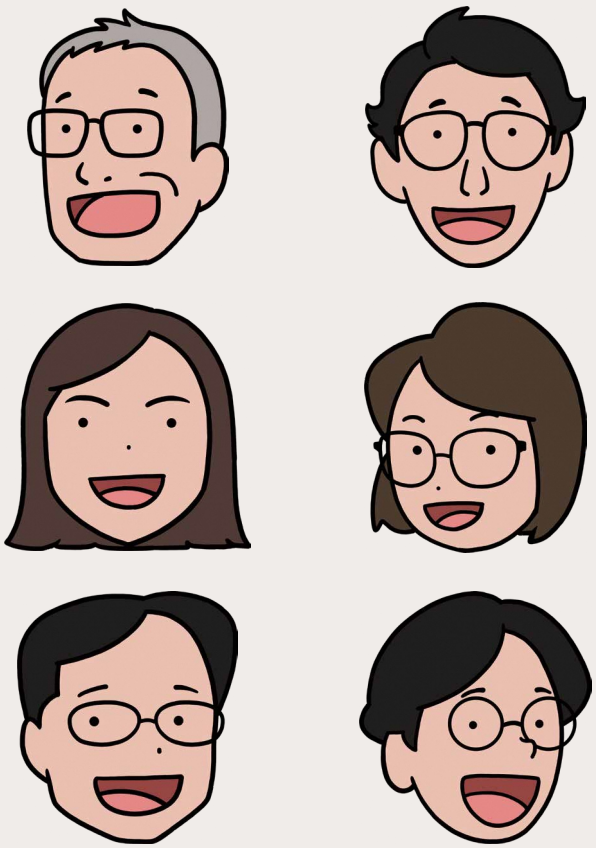


図2　本展担当者6人の似顔絵（左上から時計回りに、木下館長〈担当:1室、7室〉、喜多学芸員〈担当:2室〉、貴家学芸員〈担当：3室〉、薄田学芸員〈担当：4室、5室〉、植松学芸員〈担当：6室〉、古家学芸員〈担当：アーカイブ展示〉）
©BakuKinoshita

ぜひみなさんからも当館がもっと身近になるように、この機に「もっとこうしてほしい」とか、「こんな場所があればいいのに」というご意見やご要望をお寄せ下さい。

また、期間中は、関連イベントももりだくさんに開催いたします。多彩な講師による講演会や対談のみならず、館長と五人の学芸員も総出で講座を開催いたします。他にも、エントランスホールで「美術館をひらく」をテーマに開催する鈴木康広氏によるワークショップや、館から飛び出して当館の裏山を舞台とする楡木令子氏によるワークショップ、プロムナードやバックヤードにみなさんをお連れするツアー等々、会期中の週末は、いつもなにかが始まり、ふだんはつんとすました顔の当館の建物が、にぎやかなお祭りのような姿になればと願っています。SPAC－静岡県舞台芸術センターと連携し、対話型の鑑賞会も開催予定。俳優との協働は私たちにとっても未知の体験。「美術館をひらく、もっとひらく」を合言葉に、試行錯誤を続けます。

これからも当館は、ご利用いただくみなさんからの期待をうけて、伸びやかに姿を変えていきます。そして、ここでの体験が、みなさん一人ひとりのたいせつな心の風景の一部となるよう、われわれも心をこめて挑みます。

次の十年への第一歩を、みなさんとともに。どうぞお楽しみください。

（上席学芸員　喜多孝臣）

図3　伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》（右隻）18世紀後半　静岡県立美術館蔵

「第五福竜丸」を刻んだ版画―上野誠の作例から

主任学芸員　古家満葉

焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」がアメリカの水爆実験で被災してから、今年で七十二年の時が過ぎた。一九五四（昭和二十九）年三月一日、アメリカがマーシャル諸島ビキニ環礁で行った水爆実験によって放射能物質を含んだ〝死の灰〟が降り注ぎ、第五福竜丸をはじめとする日本各地から出港した漁船の乗組員らが被爆、漁獲物も汚染された。「ビキニ事件」と呼ばれるこの出来事は、静岡県のみならず日本全国に大きな衝撃を与え、戦後の原水爆禁止運動の出発点として今もなお記憶されている。このことを着想源とした作品はあらゆる芸術分野で制作され、同年十一月には、水爆実験で生まれた怪獣が放射能の熱線で街を焼き尽くす「水爆大怪獣」映画『ゴジラ』第一作が公開された。美術作品としては、ベン・シャーンの〈ラッキー・ドラゴン〉シリーズ（一九六〇～六二）がよく知られているが、被災当時に強く関心を寄せ、その事実を告発する作品を発表した美術家の多くは木版画家たちであった。それは、当時の版画家が、「それに至る戦後約十年間を通じて、美術のどの他の分野よりも、大衆的な立場に立って歴史の証言者としての実績をつみあげてきたことと無関係ではなかった」[1]からであり、一九四九（昭和二十四）年に設立された日本版画運動協会が主導した社会主義リアリズムを基盤とする版表現の動向と密接に関係している。例えば、一九五四（昭和二十九）年六月に東京都美術館で開催された第二回ニッポン展（前衛美術会主催）には、新居広治が原画、上野誠が彫りを手がけた《テープ》を含めた日本版画運動協会による「原水爆禁止のための群作版画」が出品されている。この頃、同協会では『水爆版画集』の制作も企画されており、協会の会報誌である『版画運動新聞』にもビキニ事件を主題とした作品―村上暁人《去りやらぬ不安》（一九五四、十五号掲載）や、第五福竜丸乗組員であった久保山愛吉の死を描いた小林喜巳子《一日本人の生命》（一九五四、十六号掲載）など―が掲載された。[2]第五福竜丸平和協会によって一九七六（昭和五十一）年に編集された『ビキニ水爆被災資料集』にも、上野や新居、滝平二郎、村上、小林らによる一九五〇～六〇年代の作品や、七〇年代に活発化した「第五福竜丸保存運動」の流れを受けて制作された絵本『よみがえれ 海の男たち 第五福竜丸』（村枝三郎・文／青木鐵夫・絵、私家版、一九七四）などが紹介されている。

ビキニ事件をモチーフとした作品を手がけた版画家たちの中で、〝被災〟そして〝廃船〟と、異なる状況下におかれた第五福竜丸の姿を最も早い時期に捉えたのが、反戦・反核の版画家として知られる上野誠（一九〇九～八〇）であった。[3]現在の長野県長野市川中島に生まれた上野は、一九三一（昭和六）年に東京美術学校図画師範科へ入学するも、在学中に参加した学内改革運動で検挙され翌年退学。郷里に戻り木版画の制作を始め、一九三六（昭和十一）年の国画会展版画部に初入選する。その後、教員として東京の学校に勤めていた一九三七（昭和十二）年に帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）に留学していた中国人版画家の劉峴（リュウシェン）と出会い、その勧めで手にした魯迅の編集によるケーテ・コルヴィッツの画集に強く感化される。戦時中は教員として鹿児島や岐阜などを転々とし、戦後は一九五二（昭和二十七）年に上京してから本格的な制作活動を開始。ライプツィヒ世界平和運動十周年記念展で金賞を受賞した〈ヒロシマ三部作〉（一九五九）や、〈原爆の長崎〉シリーズ（一九六一～六二）など原爆やその被害を題材とした作品を多く手がけた。版画家としての上野の分岐点は、ビキニ事件に端を発する原水爆禁止運動の最中のことである。第五福竜丸の被災以降、原水爆への抗議運動は署名運動を中心に全国各地に広がった。そして、一九五四（昭和二十九）年四月、上野駅のガード下で出会った原水爆の全面禁止を訴える広島の被爆者の存在は上野に大きな衝撃を与え、原爆主題に取り組む端緒となった。翌年発表された《ケロイド症者の原水爆戦防止の訴え》は、その光景を描いた代表作として知られている。この作品に先行して、上野は第五福竜丸が被災した同年、暗い空を背景に焼津港へ繋留された一隻の漁船――第五福竜丸を墨一色で摺り出した木版画を制作した［図1］。実際に焼津港を訪れた上野は、七月二十七日付の日記に「一ヶ月ぶりで多少のデッサン、焼津の漁師を描く。つかみとるように描き度い。これは職美の桜井陽司氏の叫びだ、同感以上の響鳴！ 鳴り渡るような素描、えぐるような素描をこそ!!」[4]と記している。「同感以上の響鳴」を求めてデッサンされた焼津の港は、上野の強い感情と共に白黒の木版に刻まれた。リアリズムによる美術教育を推し進めた絵本作家の箕田源次郎は、児童雑誌の中でこの作品のことを「上野さんは、水爆への怒りをこ

めて、この絵をかいたのです」[5]と紹介している。

反核を訴えるシンボル的存在となった第五福竜丸それ自体は、一九五六（昭和三十一）年に東京水産大学練習船に改造され「はやぶさ丸」に改名。老朽化のため一九六六（昭和四十一）年四月に廃船処分となり、最終的に東京の埋立地―夢の島に放棄されてしまった。上野誠が描いたもう一つの第五福竜丸は、この頃、廃棄され朽ちていく姿を象徴的に捉えた《廃船・第五福竜丸》（一九七〇）［図2］である。この作品について、上野と美校時代に運動を共にした洲之内徹は次のように語る。「白と黒との反転、かねあいが版画独特の表現とも、面白さともいえるが、その辺りのところがこの〈廃船〉では実に自然に、微妙に、リズミカルに行っている。作者はいちいち考えてやっているのではなく、彫りながらそうなって行くのだが、上野誠の彫りの巧さということをそういう意味に解してもらってもいい。彼の版画は彫で勝負する。…（中略）…彼が象徴的と考えた作品のどれよりも、この〈廃船〉は象徴的だと私は思う。力み返って凄んでいる〈原子野〉シリーズなどよりもこの方が、何か、水爆の怖さのようなものが惻々と見に迫ってくるではないか[6]」。第五福竜丸が被った水爆の恐怖を、淡々と、静かな迫力をもって画面に生み出しているのは、洲之内の言う通り上野の「彫」の力に他ならない。その後、放棄された廃船が第五福竜丸であることが判明すると、一九六九（昭和四十四）年七月には第五福竜丸や関係資料を保存し、核兵器禁止運動に貢献することを目的とした第五福竜丸保存委員会が発足。保存運動の末、一九七六（昭和五十一）年六月に展示館が開館し、現在まで公開が続いている。上野と第五福竜丸の関係は直接的な作品の題材にとどまらず、おそらくは一般公開が始まってから第五福竜丸平和協会によって配布されたと考えられる「江東夢の島 第五福竜丸参観記念」の印が押された色紙［図3］にも、上野の《海を越える鳩》（一九六九）が印刷されていたことが確認できた。今後は平和運動の推進者でもあった上野と原水爆禁止運動、第五福竜丸保存運動との関わりも含めて、更なる調査を進めたい。

図1 《第五福竜丸》一九五四年、木版墨摺・紙、ひとミュージアム上野誠版画館蔵

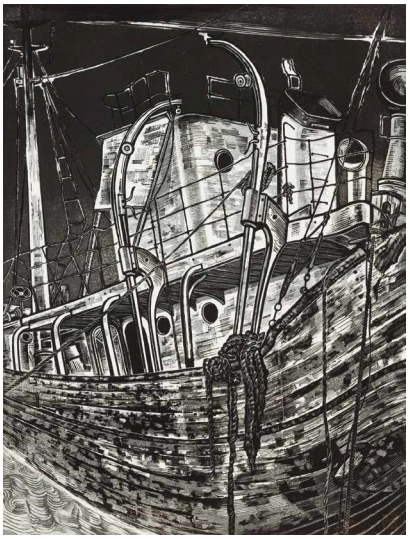


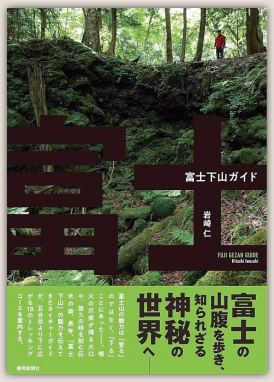
図2 《廃船・第五福竜丸》一九七〇年、木版墨二色摺・紙、ひとミュージアム上野誠版画館蔵

図3 「第五福竜丸参観記念色紙」制作年不詳、印刷・紙、個人蔵

1 第五福竜丸平和協会編『ビキニ水爆被災資料集』東京大学出版会、一九七六年、五八七頁。
2 「彫刻刀が刻む戦後日本 二つの民衆版画運動」展図録（町田市立国際版画美術館、二〇二二年）、六十二頁。
3 「第五福竜丸をとらえる……作品紹介⑨上野誠」『第五福竜丸だより』第百二十九号、一九八九年一月十五日、四面。
4 『上野誠全版画集』形象社、一九八一年、二二二頁。文中に登場する「職美」とは職場美術協議会の略称で、会社や工場の労働組合文化活動の一環として盛んであった美術部の全国組織のこと。新潟県出身の洋画家・桜井（櫻井）陽司（一九一五～二〇〇〇）が所属していた。
5 『日本の子ども』第十三巻四号、一九六八年四月、講学館、巻頭グラビア（頁記載なし）。
6 洲之内徹「気まぐれ美術館155 なんべん話を聞いてもおんなじや」『芸術新潮』三十七巻十二号（通巻四四四号）、一九八六年十二月、新潮社、一〇一頁。

本の窓

岩崎仁 著
『富士下山ガイド』
静岡新聞社 二〇二四年



今から六、七年ほど前、謎の多い館蔵品・墨江武禅《芙蓉峯細見之図》（一七九九年頃）に影響され、画中に描かれている神社をはじめ、富士山の中腹から山麓に点在するスポットをいくつか巡ってみたことがあります。鹿が闊歩する深い森、かわいらしい実をつけるコケモモ（隠れた富士山名物）。とても静かで、変化に富んだ地形・環境には、眼下の景色を堪能する富士登山とは異なる面白さがあります。さて、意表をつくタイトルの本書ですが、著者は五合目より下のエリアを主な対象としたエコツアーのガイドを長年務めていらっしゃいます。本書は本格的な登山よりも参加しやすい「低山ハイキング」の案内書であるだけに留まらず、著者の豊富な経験と知識に基づき、中腹から山麓にかけての生態系や地質、そして歴史についてもわかりやすく解説しています。登るだけではない、富士山の知られざる魅力を探るのに好適な一冊です。

（上席学芸員 浦澤倫太郎）

美術館とたまに犬

企画総務課　伊藤　圭

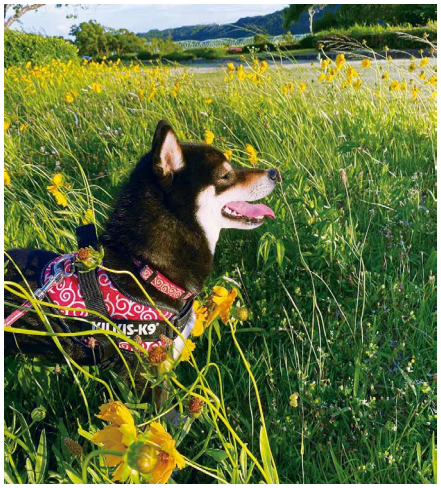
十月十一日に開幕した「金曜ロードショーとジブリ展」が一月四日に無事閉幕いたしました。学芸課と企画総務課の職員、展示室の案内や設備警備スタッフ、交通誘導員、ボランティア、美術館友の会の皆さんなど、県立美術館に関わる全ての皆様のご協力のおかげで過去最多のお客様をお迎えすることができました。誠にありがとうございました。

さて、私が県立美術館の配属となってから、早三年が経とうとしています。人事異動が発表され、引継ぎで初めて県立美術館を訪れたときのことを懐かしく感じます。

県立美術館に配属になるまで県立美術館のみならず、「美術館」という建物に入ったことすらなかった自分ですが、三年の間にフロアレクチャーに参加したり、学芸員から色々なことを教えてもらったりすると、なんだか自分も詳しくなった気がして、友人等に得意気に説明してしまうこともありました。

美術館は「敷居が高い」と言われることがあります。正直、ここに来るまでは自分もそう思っていましたが、県立美術館で働く中で、来る人を選ぶ場所ではないということがわかりました。文化とはあまり関わりのない人生を歩んできた自分でも楽しむことができる「誰でも気軽に行ける場所」であるということを多くの方々に伝えていきたいと思います。

少し文字数が余ったので愛犬をご紹介します。美術館に配属になった初年度から実家で黒柴を飼い始めました。名前は「あんこ」です。柴犬にしてはサイズが小さいですが、とてもパワフルで元気いっぱいです。柴犬は警戒心が強く、よく吠えるため一般的に飼いにくい犬種だと言われていますが、あんこはなぜか全く吠えず、威嚇もしたことがありません。ただ、犬との接し方が下手なのか、よく吠えられます。島田の河川敷が今のお散歩コースですが、いつか遠征して彫刻プロムナードを散歩したいと思います。



たそがれるあんこ

利用案内

開館時間：10:00～17:30（展示室への入室は17:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館）
年末年始
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡IC、清水ICから約25分　日本平久能山スマートICから約15分
◎新東名高速道路　新静岡ICから約25分

ウェブサイト：https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学　芸　課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

静岡県立美術館開館40周年企業サポーターの創設

県立美術館は、これまで多様化・高度化する美術館の役割に対応するため、地域の皆様や多くの企業からご支援、ご協力を賜りながら活動してきました。

人口減少、少子高齢化社会が進行する中で、これからの美術館活動を充実、継続していくため、開館40周年を機に、年間を通じて企業・団体と美術館が連携を図る「静岡県立美術館開館40周年企業サポーター」を創設しました。

令和８年度は、６社からご賛同をいただきました。

わたしたちは、静岡県立美術館開館40周年を応援しています

〈コアサポーター〉

IAI Quality and Innovation
アイワグループ
Shizu tetsu 街にいろどりを。人にときめきを。
Hagoromo はごろもフーズ
村上開明堂

〈サポーター〉

Suzuyo

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.161　編集発行：静岡県立美術館　2026年4月1日　印刷：文光堂印刷株式会社